

# 共済主義実践運動

——青空対話集会を行う——



去る、六月十日、梅雨時には珍しく晴れわたった青空の下で、東京、銀座の数寄屋橋公園で「共済主義実践運動」が行われた。

この日は、五・五キロという世界で一番長い歩行者天国の開通の日でもあり、いつもの日曜日より人も多く、百四十万人という、まるでお祭り騒ぎのようであった。

そんな中を、「共済主義実践運動」の街頭行動は、「青空対話集会」と銘うって、午後

一時より、一時間にわたって行われた。暑い日であったが、約四十名程の非常に熱心な青年男女がこの行動に参加した。特に、この日のために用意したブルーのリボンと、「共済主義」と書かれたネームプレートは、白のブラウスに紺のスカートという装いの女子会員を、清楚に美しく見せていた。

十一枚のカラフルなブラカードには、「個人主義の時代は終わった」「お金のドレイに

はなりたくない」「世界は一つ」などの言葉が書かれ、この運動の主旨を知らない人々が、少しでもわかるようにと、いろいろ検討され、非常に苦心したということである。

この日の目的は、まず「共済主義実践運動」の存在を世の中の人々に知ってもらうこと。また、めまぐるしく悪化をたどっている今の世の中で、夢や希望を持つことすら考えられない若者たち呼びかけ、この運動の実践によって、社会の中に生きることの喜びを示すこと。それに、現在国会でも審議中である「国鉄問題」に抜本的な七つの対策案を与えることであった。

十分位たった頃には、最初どうやって人々の中に入り込んで話をしようか困惑した感じのあった会員も、すっかり慣れて来たようである。パンフレットを配布しながら、噴水の側で腰をかけて休んでいる人、待ち合わせで時間のあるような人、興味を持ってくれそうな人、今の世を憂えていそうな人、これらの人たちがけて、積極的に話しかけて行った。その対話をいくつか拾ってみることにする。

「共済主義実践運動です。物価の高騰、公害問題、教育問題など現代の社会の多くの不幸な問題は、自分の利益だけを追求しようとす

る姿勢に問題があると思いませんか。私たちは、他を優先する気持で、少しでも平和で人間性豊かな社会を作ることを目指しています。」

「いい運動だね。ゆっくり読ませてもらいますよ。」

「共済主義には三つの根本の柱があります。『共に助け』『共に作り』『共に栄える』ということです。」

「共産主義とは違うんですか？」

「全然違います。共産主義も自由主義も、目的を同じくしながら利害と権力を求めて争いが絶えないでしょう。共済主義は、あくまでも人間を中心とする考え方なのです。人間にプラスするか、マイナスするかというのが、価値判断の基準です。」

「こんなことやっちゃって、甘いよ。具体的には何をやるんだ？」

「これは思想運動ではないんです。一つ一つの問題について考え、社会に貢献奉仕していくという精神運動であり、また一人一人が毎日の生活で無駄を省いて、余ったお金を社会の為に使おうとする生活運動です。」

「僕は他人のことは考えないようにしているんだ。自分のことだけ考えていけばいいのさ」

「でも、お金も物も、全て自分一人の力ではできないと思いませんか。私は何人かと共同生活して、お金も物も少しでも余ったら、有効な方向に使うよう心がけているんです。だからといって、着る物も同じ、何もかも一緒というんじゃないんで、お互いの個性は、良い面は伸ばし、足りない面は補っていくようにしているんです。」

「まあやりたい人は、やったらいいでしょう。賛同する人あり、関心を示さない人あり、また話に応じないように見えた人でも「国鉄問題」には興味を示す人もいた。」

「第一回目で、特に若い会員が知恵をしばり、最善の努力をばらって、この日のために準備した。しかし、経験不足のために、細かな点における配慮が足りなかった面もあった。たとえば、せっかく協賛してくれる人たちの名前前のメモも不十分であった。しかし、回を重ねる度に、より多くの人に賛同してもらえよう。今後も行なっていきたい」というのが会員に共通した反省であった。

共済会が発足したのは今から四年前、渋谷

の一角で数人が集まり、共済主義思想の実践体として始まった。現在では、全国に二十ヶ所の支部を設け、五百余名の会員を持つようになった。

共済主義とは「共に作り」「共に助け」「共に栄える」を旗印に、この混乱の極に達している人類社会を救う為に出現した動きです。これは思想運動でなく、精神運動であり、生活運動であります。「共に作る」とは、一人一人が自己の利益の為だけでなく、社会に貢献する為働いているという自覚を持って、産み出して行く動きですから、仕事の選択は個人の自覚によって決めていくもので、ここで働いても良いのです。

「共済」は共に助けあって行くという事です。が、ただ、物を与え合うという事ではなく、そのなかでも、一人の人間がより向上して行くにはどのようにしたら良いかを考えて行います。

「共済」とは、一個人だけが栄えるのではなく「人類の真の幸福とは、共に栄えることにある」とする動きです。

共済主義は、自由主義でもなければ全体主義でもありません。強いて言えば「中庸精神」に基づく人間主義ということができましよう。

人間性を喪失した我々が、豊かな人間性を復活し、弱肉強食の世相を改め、個人主義を排し、人間は一人では生きられない存在であるから、「利他優先」の精神の基に互いに助け合っていくとするものです。共済会の組織構成は、本部と二十ヶ所の支部があります。本部には、会長一名、幹事五名、会計監査一名の役員がいます。本部での仕事は、共済会全体の運営並びに実践行動の方針を企画立案すると同時に、会員の啓蒙を計る。また、支部で充分に処理できない問題が起きた場合は、役員会で検討し、支部を指導します。支部を、支部長一名、代議員（会員十名毎に一名を選択する）、会員となります。支部の仕事は支部の運営と企画。実践活動を通じて会員と共に共済主義思想について話し合い、その結果や疑問点などを本部に報告します。

支部会員の中には、共同生活をしている者も大勢います。この共同生活も普通とは異なり、日用品などは共同して使い、食事なども当番制で作り、そうじなどは各自が自然と部所を決めているようです。また、一週間に一度反省会を開き、お互いの足りない点などを話し合い、人間性の向上に努めています。

今まで、共済会の中だけで共済主義思想に

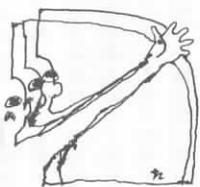
ついて語り、話合ってきましたが、今年からは、会員以外の社会一般の人達に呼びかけて行く為に「共済主義」というパンフレットを出し、私達の提言として社会問題を取り上げ、共済主義としての考え方を述べました。これは、会員同志が良くなるだけでなく、社会全体が良くなるなければ人類の幸福はないと考えるからです。

共済主義実践運動

総務部 中田良子

共済主義実践運動本部

東京都渋谷区松濤一―七―二  
電話 四六〇―九四四四―五



## なじみ深い

### セーラさんと会見



イスラエル大使館時代のベンジャミン・セーラさんは、専らキブツ研修生の担当であり、本来が社交家であり、無類の親切心から沢山の日本青年男女にもなじみ深い人であった。雪の北海道、大雪青年の家のキブツ研修会、札幌に於ての講演会なども思い出の一つであり、帰国後もヒスタドルトにあつて、キ

ブツ連盟と連絡を取り、日本の研修生世話係であり、今から四年前の研修生には特に印象深い思い出がある。国連農業機構のマニラに於ける任務を終り、帰途日本に立寄り、久方ぶりで赤池さんの通訳で二時間余の久闊は嬉しかった。再びヒスタドルトに席を置き日本青年男女の友となることを切望する。

## 協会日誌

6月1日 真の農村後継者を育てている愛農会の副会長・浦田善之さんが来訪。新しい農村のために日本の青年をイスラエルのモシヤブへ送りたいとのこと。  
6月2日 第九回生・バルカイに行った森逸子さん元気に帰国  
6月3日 第八回生だった水野正行君、施設のチャリテイションの案内をもって来訪。  
6月7日 月刊キブツの愛読者、

駒崎満男さんが来訪。こんど、子供さんたちといっしょに共同体をまわってみたいとのこと。

西讓君がキブツ・ダリヤにむけて出発。手塚さんは心境農産へ取材に出かける。

6月14日 当協会の定期総会が家の光協会で行われ、午後から事務所はからっぽ。川村せつ子さんが留守番に来てくれた。畠中君は農大でキブツ講演

6月18日 N H K が3時間におたつて手塚さんのお話を録音。  
6月21日 月刊キブツ七月号できしり。夜おそくまで発送作業がつづく。

6月22日 長崎県の農政にたずさわっておられる松藤さんが連日来訪。日本の農政の中に、キブツの思考を生かす必要があると熱心なお話。

6月23日 那須農場より、吉田君、百瀬君らが自然農法で作った野菜をおみやげに来訪。

6月24日 雨のあい間の日曜日

明治神宮の花しょうぶの間を散歩して、しばし忙しさを忘れて救われる思い。

6月29日 第九回研修生の世話係・中村一郎さんが帰国。なつかしい日焼けした顔で、研修生の近況報告をしてくれた。

7月1日 昨年度のクファアル・マサリックグループの人達が集まった。男子はまだ旅行途中で帰国していない。鷹本、相川、鈴木、丸岡、金原、伊集院と、女性ばかりの六人の集い。

7月3日 関西方面の協同体の取材をかねて奥村が京都へ出かけた。

7月13日 イスラエル最大のキブツ、ギブアット・ブレネルから日本の協同体を勉強しようというヨアブ君がやって来た。いま東山産業に滞在している。

7月15日 日曜日を利用して、奥村と千賀子が日光協同養鶏場におじゃましました。久しぶりに緑の風に吹かれて太陽に照らされ

## 編集後記

生きかえったように全身がよみがえる。協同で土と取りくんでいる人の顔が美しい。

7月21日 共済主義実践運動本部の作田さんと角さんが来訪。

四年半ほど前に数人のメンバーで始まった運動である。共同生活をしているメンバーもいる。

7月22日 第十二回キブツ研修生選考会が家の光協会で行われる。どの応募者も、それぞれキブツへ行く必然性を意欲的に語っていた。

7月23日 長崎県の島田昇さん来訪。五月にアキバ・エガー氏の講演をきくため上京され、以来東京で活動中、共同体運動を熱心に進めている。八十才近いというのに、お年を知らない元気さ。

7月24日 インドのアシユラムから帰って来た青年が来訪。童顔に光があふれていた。

7月29日 第七回生の岡田暁君と高島正典君が来訪。

▽八月号の編集がおくれ、合併号にさせていただきます。アキバ・エガー氏の「今日の諸問題」は、去る五月二十五日のA A I東京セミナーに於けるレクチャーの一部です。

対立を基盤にし、闘争・競争に明け暮れる今の社会がこのまま続けば、本当に地球は人間の住めない場所になってしまう。給料がどんなにあがろうとも、生活がどんなに便利になろうとも、対立を基盤にした価値観からは、絶対に、真に安定した幸福な社会は招来できない。奥村▽広田君子さんの手紙（イスラエル通信）について、考えてみました。共同体というより人間に失望したということですが、これは我々の理想としていたキブツと、実際のキブツとのギャップが開きすぎたというの

ではないでしょうか？ しかし、理想のキブツでなかったにせよ、人々が、ほぼキブツの原則に従って、数十年生活して来たこと、この生活形態がイスラエルの柱となつて支えて来たこと、世界の多くの若者が好んでやつて来ること、人間の自由と平等というテーマにおいて、キブツにまさるものがいまだ生まれていないことは事実ではないでしょうか。理想的な論文と、理想を指して努力している現実の生活

の重みは違います。その違いがあるからこそ、キブツ研修の意義があるのでは？ **マサオ**▽鉢植への緑がこくなりました。急に空気が薄くなり、むし暑くなってきました。『夏』という単語が、いたるところから目に入ってきました。そして今、夏になつていることに気がつきました。忘れていた、遠いところの夏を思うように。——

まぶしい光りの輝きと、緑の燃えるにおいに刺され、私の全身に訪れてきました。その時、私の中から緑の夏が生まれ、私は夏の子供になっていました。

今、多くの仲間を支えられたとてもうれしい仕事ですが、自然から隔離されたコンクリートの中の生活では、そのあまりの不自然さに全身の細胞が生ききらなくて、もったいなくてしかたありません。その不自然さを少しでもうめるために、毎日努力をして生きています。でも、自然から離れてする「人間の努力」というものを悲しく思います。人は自然との調和の中におかれたら、全身の細胞が自らの力で最高に働き、努力という言葉を知らずに新しい生活が創りだされてきます。

でも今は、この不調和でギシギシいっている中で、自然と人との調和の社会を求めて、努力をつづけています。 **チカコ**